

首都圏における在来方言の地域資源としての再生の一事例 — 多摩地域の「のめっこい」を例として —

三井はるみ

(国立国語研究所)

1. はじめに

首都圏（東京を中心とする都市圏、ほぼ1都3県のエリア）の言語は、そこに生まれ育った人の日常語であると同時に、全国、世界から人の集まる都市の言語であり、標準語の基盤となる基準性を求められる言語でもある。人口の流動性、情報と物の流通量の多さ、社会的多様性により、新しい事象が生じやすく変化も早く、社会的サブグループによる違いも目立つ。このような首都圏の言語の全体像を見通すことは容易ではなく、いずれの観点から切り込んでも、常に「それは一部に過ぎない」という不全感がぬぐえない。特に地域の日常語としての方言は、共通語との明確な違いが捉えにくいこともあって影が薄く、首都圏内にことばの地域差があるということも、現在一般にはほとんど意識されなくなっている。

そのような中で、本稿ではあえて、地域の中の方言の観点から首都圏内の一エリアの状況を取り上げてみたいと思う。対象とするのは、東京23区の西側に位置する多摩地域である。東京都の人口約1323万人のうち、多摩地域（島嶼部を除く23区以外の東京都）には約420万人が居住する（2012年現在）。人口の流入は多く、共通語化はいち早く完了し、特に若年層にとって「方言」は、基本的には「どこかよそのことば」である。このような中で、一部のかろうじて残存した在来方言が、地域性の表象として利用されるケースが現れてきた。この事例を通して首都圏地域における地域語の一側面を見てみたい。

2. 在来方言の地域資源としての利用

全国的な「方言の価値の上昇」の時代の中で、従来地元方言の存在意義が意識されにくかった首都圏西郊多摩地域でも、近年、地元の在来方言をネーミングやキャッチフレーズに利用する例が見られるようになってきた。

- (1) 地域でいちばんののめっこい信用金庫（青梅信用金庫キャッチフレーズ、本店：青梅市）（図1）
- (2) ふんごまっしええ！ 武蔵村山へ！（ウォーキングイベント、武蔵村山商工会、2010年10月16日）（図2）
- (3) うまかんべえ〜祭（東大和市グルメコンテスト、第1回：2012年4月28日）
- (4) 来さっせえ 奥多摩（奥多摩観光協会ニューズレタータイトル、2007年創刊）
- (5) おこじゅ、おっぺし餅（和菓子の商品名、(有)紀ノ国屋、本店：武蔵村山市）
- (6) あしっこ（立川市立第九小学校周年記念誌タイトル、100周年：1980年、130周年：2002年）



図2 ふんごまっしええ! 武蔵村山へ!
(2010年9月, 多摩都市モノレール車内)

図1 地域でいちばんのめっこい信用金庫
(2011年6月, 青梅信用金庫玉川上水支店)

地域の人に向けて、あるいは来訪者に向けて、地元らしさを示しながら、親しみや身近さの雰囲気を出し出すこのような使われ方は、方言主流社会では以前から見られたものだが(日高1996他)、共通語中心社会である首都圏では、必ずしも目立つものではなかった。さらにこれらの単語や表現は、すでに大方の人々の日常の生活の場で用いられなくなって久しく、住民に転入者の割合が高いことと相まって、受け手にとっては全く初めて目にとめることばであることも珍しくない。むしろそのことが新鮮味につながり、利用価値を高めていると考えられる。つまりこの現象は、地元の在来方言が、地域を表象する利用可能な資源として再発見され、再生利用が行われるようになったもの、と位置づけることができる。近年指摘されている「フォークロリズム¹による方言の利用」(日高2009)、「コミュニケーション・ツールとしての「ジモ方言」²の使用」(田中2011)にあたる事例である。

このように地域資源として再生利用される在来方言(俚言)として、特に「のめっこい」ということばが目につく。

- (7) 地域でいちばんのめっこい信用金庫(青梅信用金庫, 2007年度～)³ = (1)再掲
- (8) 元気の種まき ～みんなでのめっこく～(日の出町総合健康事業, 2010年度～)
- (9) のめっ恋まち東村山 ～自然・歴史・文化があふれ、人と人がふれあうまち～(東村山市観光振興プランキャッチフレーズ, 2012年3月策定)

¹ 民俗文化が本来のコンテクスト(文脈)を離れて見出される現象(日高2009)

² 生育地で使用されている「方言」であるものの、自分自身の方言としては使用せず、自分より上の世代である両親や祖父母世代の使用方言として見聞きしているもの(田中2011:19)

³ 同信金理事長のインタビュー記事である森田(2007)には、キャッチフレーズとして「のめっこい」を導入した経緯が述べられている。「地域との結びつきを深める」という経営姿勢を地元方言でシンボル化することの意義、それによって期待されるインパクトやメリットに触れており、地域資源としての方言の再生利用の明確な意図がうかがわれる。4節参照。

- (10) のめっこい料理めしあがれ（奥多摩町地域誌『たまもの』2，特集タイトル，2009年4月）
 (11) 丹波山温泉 のめっこい湯⁴（山梨県丹波山村営の温泉施設名，2000年4月26日営業開始）

ここでは、この「のめっこい」という語を代表例として取り上げ、①在来方言の再生利用の実態と背景、②再生利用によって生じる新たな受容と変容の兆し、の二点について報告する。資料は、この語に関して行った4種の小調査、①意味・用法に関する方言集調査、②多摩地域とその隣接地域における利用例調査、③受容と理解に関するWeb調査、④受容・理解・イメージに関する首都圏大学生アンケート調査の結果による。

3. 「のめっこい」の意味・用法

3.1 多摩地域の方言集から

はじめに在来方言での「のめっこい」の意味を確認する。「のめっこい」は主として関東西部に分布する⁵形容詞で、「手触りがなめらかである」「口当たり・喉ごしがなめらかである」という接触感覚に関する意味（〈接触感覚〉の意味）と、そこから派生したと考えられる「人間関係が円滑である，親しい，親しみがある」という抽象的な意味（〈人間関係〉の意味）を併せ持っている。図3は、多摩地域（隣接地域を含む）の方言集に記載されている「のめっこい」の意味を地図上に示したものである。以下に記述例を挙げる。

- (12) のめっこい：なめらか。「夕べいっぺえ飲んだら，今朝がた，顔がのめっこいや。」（鈴木為佐生（1987）『立川の方言』立川市教育委員会）【立川市】
 (13) のめっこい：人付き合いがいい。仲がよい。「のめっこくやってるってえ話だで」（武蔵野市開発公社（2009）『武蔵野界限 むかし語り』）【武蔵野市】
 (14) のめっこい（形）①表面がなめらかである。つるつるしている。②人間関係がうまく行っている。円滑である。「あの人はのめっこいからその話は俺の方からしとくべー。」（関谷和（2004）『子どものころ聞いたことば話していたことば（増補・改訂版）』）【埼玉県入間市】

〈接触感覚〉の意味のみを載せるもの（(12)），〈人間関係〉の意味のみを載せるもの（(13)），両方の意味を載せるもの（(14)）がある。ただしこれが地域差を反映したものとは即断できない。2010～2011年に立川市内生育の60～80歳代の話者4名に確認したところ，70～80歳代の話者は、「のめっこい」ものの典型として、「白くてきめの細かい肌」を挙げた上で、「仲がよい，話しやすい」といった人間関係に関する使い方にも「違和感はない」とのことであった。檜原村

⁴ 促音を含まない「のめこい」は諸方言集には記載がない。施設名とする際に語形の方角らしさを薄めたものと見られる。のめこい湯公式サイトには、「【のめこいとは？】…「のめっこい」とは丹波山村の方言で「ツルツル」「スベスベ」という意味です。」（<http://www.nomekoiyu.com/index2.html>，2013年8月8日閲覧）とあり，説明中の語形は促音を含む「のめっこい」である。

⁵ 『日本方言大辞典』で「のめっこい」の使用地域として挙げられている都県は，秋田，栃木，群馬，埼玉，東京，神奈川，山梨である。

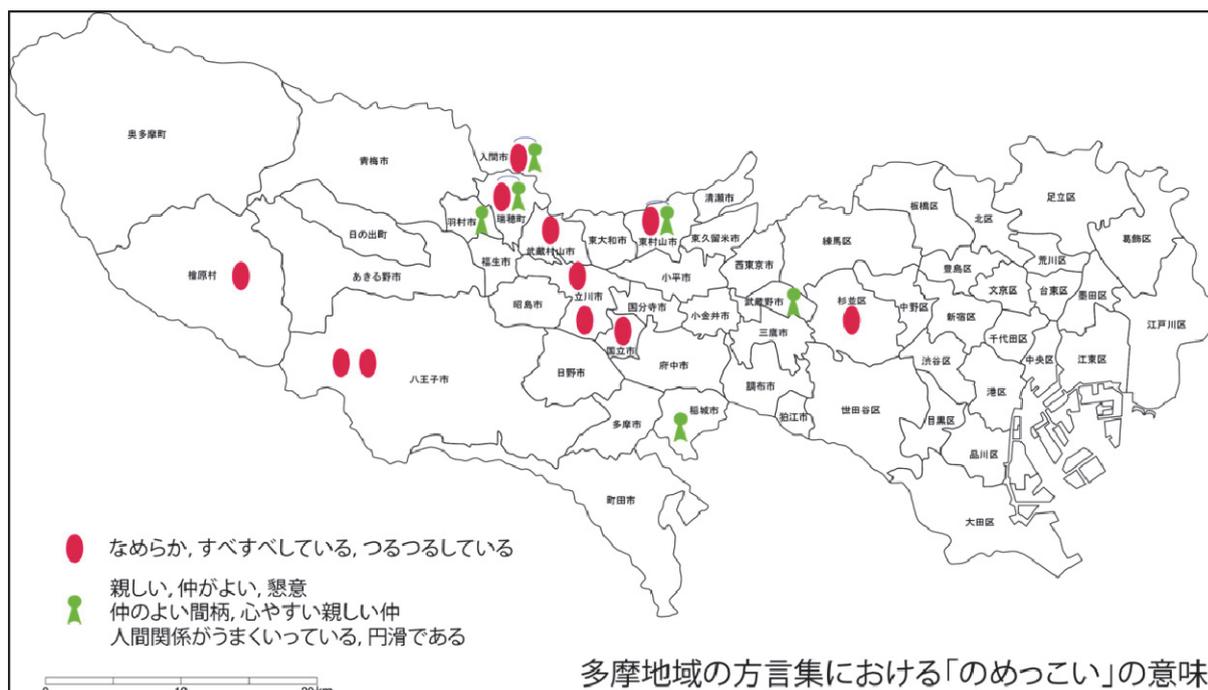


図3 多摩地域の方言集における「のめっこい」の意味⁶

生育の80歳代の話者2名（2012年確認）もほぼ同様であった。一方立川市の60歳代の話者は、この語は上の世代が使うのを聞くといい、使うとすると「うどんの喉ごしがよい」ことにほぼ限られる、とした。〈接触感覚〉の意味から〈人間関係〉の意味が派生する一方で、この語自体の使用が衰退して意味も退縮し、その中で、〈接触感覚〉の中のさらに特定の状況へと意味の限定が生じていることがうかがわれる。

3.2 多摩地域の市町議会会議録から

方言集では、〈接触感覚〉〈人間関係〉二つの意味のうち、前者を挙げるものの方が件数としては多かった。一方キャッチフレーズ等では、〈人間関係〉の意味で用いられているものがほとんどである。実際の使用傾向はどうなのだろうか。

「のめっこい」は、方言形（俚言）でありながら、市町村議会のような、地域の公的な場でも使用されることがある。市町議会会議録には、次のような例が見られる⁷。

- (15) 補助金は一種の潤滑剤，一滴の油によって，極めて動きがのめっこくなったり，こすっばくなったりいたします。（1996年9月19日 東村山市議会平成8年9月定例会 小町佐市議員 1938年生）
- (16) (保育園民営化の説明に対して) 近隣にはこのことがありますよという話は早めにしておか

⁶ 資料とした方言集は文献末に掲出した。

⁷ Web上で公開されている，各市町議会会議録検索システムにより，検索を行った。

ないのめっこくいかないのではないかと思うので、その辺の考えをお願いいたします。

(2010年3月29日 福生市議会平成22年全員協議会 小野沢久議員 1946年生)

(17) 私が言っているのは、せめて町の下に活断層がありますよと、そういう情報提供をもうちよつとのめっこくやった方がいいんじゃないかと、そういう発言のあれなんですよ。(2008年12月3日 瑞穂町議会平成20年6月定例会 上野勝議員 1948年生)

(18) (学校の教職員の) 異動というものは本当に怖いもので、我々がしっかりとのめっこくなつたなあという、のめっこいというか、そういうことですね。のめっこくなってきたなあというふうになってきたときに、サッと異動してしまうという、この危うさがあるわけです。(2010年3月23日 武蔵野市議会平成22年予算特別委員会 近藤和義議員 1947年生)

(15)のように物理的ななめらかさに近い意味で用いられている例もあるが、ほとんどは、(16)～(18)のように、地域社会における〈人間関係〉に関する用例である。(16)は「関係が円滑」、(17)は「きめ細かく」、(18)は「懇意」といった意味であり、(16)(17)はそれぞれ〈接触感覚〉の意味から、(18)は(16)のような意味からさらに派生したものと考えられる。キャッチフレーズ等において〈人間関係〉の意味での使用例が多いことには、このような使用状況の素地がある。

3.3 「のめっこい」の意味・用法と方言利用

「のめっこい」という語は、他の方言形同様全体としては使用が衰退し、その中で意味が一部の食感に限定されていく傾向が見られる。一方、派生義である〈人間関係〉の意味は、地域生活の中で重視される「密な付き合いに基づいて人間関係をスムーズに運ぶ」という行動規範を余すところなく表現するものである。そのため、このような話題が取り上げられやすい場(典型的には、地元出身者を中心とした地域の会合)では、相対的に使用頻度が高くなる。他の表現に代え難い場合もあるようである(例(18)参照)。こういった使用状況のもとで、「のめっこい」は、地域の人間関係の親密さを積極的に表す語として見出され、キャッチフレーズ等として前面に押し出されて利用されるようになったものと推測される。

地域資源としての方言利用を含む、現代社会における方言の意識的な活用の背景には「コミュニケーションを円滑で温かみのあるものにしたいという関係者の意図が潜む」という指摘がある(小林2007:vii)。「のめっこい」の〈人間関係〉の意味への拡張は、このような機能を意味そのものとして直接的に体现していると見られる点、興味深い。

4. 地域資源としての方言利用の動機

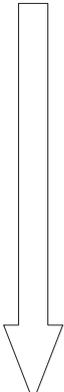
多摩地域で方言をネーミングやキャッチフレーズとして利用する理由は、他の地域と同様、地元らしさを示しながら、親しみや身近さの雰囲気醸し出すところにあると考えられる。利用主体は、自治体(3)(8)(9)(11)や地域の公共的団体(観光協会(4)、商工会(2)、公立学校(6))が多いが、企業(信用金庫(1)、和菓子屋(5))の例もある。ここで、「のめっこい」という語

を戦略的にキャッチフレーズに取り入れた青梅信用金庫のケースを取り上げ、具体的にどのような動機で「のめっこい」という語が採用されたか、資料等によって見てみる。

青梅信用金庫は、青梅市に本店を置く信用金庫で、多摩地域北西部（主として青梅線沿線と中央線以北エリア）および、それに隣接する埼玉県南部（旧入間郡地域）に店舗網を持つ。同信金では、2007年度からの中期経営計画で、地域との結びつきを重視する姿勢を「地域でいちばんのめっこい信用金庫」とキャッチフレーズ化し、重点施策として掲げるとともに、ロゴマークとして、ポスター、胸章、名刺、広告（HP、のぼり、チラシ、袋、ティッシュ、車内広告）等に用いている（図1参照）。

同信金HPでは、トップページに「のめっこい」の説明を掲げている（<http://www.aosyn.co.jp/nometoha.htm>, 2013年7月16日閲覧）。そこでは、「西多摩や埼玉南西部地域の一部で使用されています。意味：（肌が）すべすべしている、（うどん等の）のど越しがいい、親しみやすい。」と説明した後に、「あおしんは「地域のお客様との一体となる親密な関係」をつくることを「のめっこい」の意味として定義しました。」としている。この語が営業エリアと重なる地域独自のことばとの認識の上で採用されたこと、在来方言の意味をベースに、営業理念を表すことばとして再定義を試みようとする姿勢がうかがわれる。

同信金理事長のインタビュー記事（森田 2007）から、キャッチフレーズとして「のめっこい」が導入された背景を項目化してまとめると、次のようになる。



課 題	<ul style="list-style-type: none"> ■ 周りに規模の大きな信用金庫が生まれる中で、どうやって信用金庫の使命を果たすか。
戦 略	<ul style="list-style-type: none"> ■ 地域との結びつきをいっそう深める。
基本姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ①相手を裏切らない ②相談できる ③頼りになる
シンボル化	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「のめっこい」 関係＝地元方言 ■ 別の提案「地元で最初に相談できる信用金庫」→不採用
効 果	<ul style="list-style-type: none"> ■ インパクトがある。アピールする。 ■ お客さんはこのことばを知らなくてもよい。話の糸口になる。

図4 「のめっこい」採用のプロセス（森田2007 を項目化）

営業エリアの重なるより規模の大きい信金に対する独自性を模索した結果、地域との結びつきを深めるといふ戦略が見出され、その姿勢を表象するシンボルとして、内容的にも合致する地元方言が採用されたことがわかる。さらに、金融機関が地元方言を堂々とキャッチフレーズに用いることのインパクト、知らないことばであるがゆえにかえってコミュニケーションの糸口になるというメリットも考慮されている。

生活言語から切り離された方言を、地域性の表象として企業活動に取り入れた例であり、「地元らしさを示しながら、親しみや身近さの雰囲気醸し出す」という機能を意識した、典型的な地域資源としての方言の再生利用であることがわかる。また、意味の変化の方向から見ると、3.

2.節で取り上げた実際の使用例の偏り以上に、「のめっこい」という語の意味を、「親しみや身近さの雰囲気醸し出す」という方言の利用の意図に合致する方向に人為的にシフトしているとも見られる。使用状況が意味変化を誘発している、あるいは両者に相互作用が生じていると考えることができる。

5. 接触機会の増加と用法の変化の兆し

キャッチフレーズ等として取り上げられることによって、「のめっこい」ということばは、本来この語を使用していなかった人々の耳目に触れる機会が増加した。これによりこの語を認知し新たに使用する人が現れる兆しがある。一方、実際の使用場面には触れないことから、意味が不確かであり、与えられたわずかな文脈を元に、独自に再解釈して使用する例も見られる。特に〈人間関係〉の意味は、短いフレーズからは正確に推測しにくいと見られ、多様な意味変種が生まれている。

ただしそれらは数としてはまだわずかなものであり、アンケート調査等の方法では十分に事例を収集できないと予想された。そこで、わずかな事例を効率的に収集する手段として、Web上の記事の検索を行った（2011年5～6・12月、2012年1月）。Web上の記事の執筆者は比較的若い世代の人が多く、今回の目的に関してはメリットである。

Web上で「のめっこい」とその活用形を検索すると、ネーミングやキャッチフレーズとして取り上げられた例については、「のめっこい湯」（(11)）に関する記事が多く、青梅信用金庫のキャッチフレーズ（(1)（7））に関する記事も見られる（その他は方言集が多い。地の文に方言と意識して、または意識せずに使われている記事もわずかにある）。このうち、「のめっこい湯」に関する記事の大部分は、旅行記等の温泉の感想であり、その中で「のめっこい」の意味について、丹波山村公式サイトの説明を元に触れているものが多い。意味に関するゆれなどは見られない。

これに対し、青梅信用金庫のキャッチフレーズは、様々な取り上げられ方をしている。

まず、「バスの車内放送で初めて聞いた」という接触機会の発生をうかがわせる例がある（都営バス情報センター「都内最長路線 梅70」2008年10月14日の記事、<http://blogs.yahoo.co.jp/ywmr869/archive/2008/10/14>、2013年7月16日参照）。この筆者は青梅信用金庫のHPで「のめっこい」の意味を確認している。

一方次の例では、本来の意味からずれが生じている。

(19) あおしん優勝！都の頂点だ。最後まであきらめない「のめっこい野球」の勝利だった。

（略）あおしんが標榜する新しいキャッチコピー「地域でいちばんのめっこい信用金庫」を象徴するようなどる臭い得点であったが（略）代打浜中がのめっこく選んで歩き、石井のヒットなどで無死満塁とした。（青梅スポーツ167「あおしん都信金大会で優勝！」2007年07月17日の記事、<http://omesports.exblog.jp/5906912/>、2013年7月16日参照）

(20) 『のめっこい』とは青梅の方言で、親切とかかわいいという意味らしいです。（略）私も負けずとのめっこいことをしようと「エアタオルをご使用下さい」という表示がある所

でタオルで手を拭いてるジェスチャーをしたら友人にドン引きされました。のめっこいって難しい。（牛屋の店「のめっこい」2009年4月6日の記事, <http://ameblo.jp/ushiya3/entry-10237451346.html>, 2012年1月8日参照)

(19)では「粘り強い」「しつこい」といった意味で使われている⁸。(20)では、「親切とかかわいという意味」としながら、人をおもしろがらせる行動を「のめっこいこと」と言っている。従来の「のめっこい」には全くなかった使い方である。ただし、以上の例はいずれも、何らかの形で青梅信用金庫の情報に触れていることが推測される。接触機会が増えたとは言っても、現時点では、直接接以上以上に広まる気配は見られない。

6. 首都圏若年層の現状と今後の動向

現在「のめっこい」という語に現れている、このような限定的な接触機会の増加と用法の変化の兆しは、一時的な現象に止まるだろうか。それとも、1980年代に多摩西部地域から広がった「うざったい」のように、今後使用者・使用地域が拡大していくだろうか。拡大する場合、それに伴って意味の面ではどのような変容が生じるだろうか。

このような今後の動向に関し、現時点で変化の方向を予測し、もし変化が進行していく場合には、その動きを追跡する起点とするために、「のめっこい」と関連語について、受容・理解・イメージに関する首都圏大学生アンケート調査を行った⁹。

それによると、「「のめっこい」ということばを知っているか」については、回答者356名中、「知っている」と回答したのは1名のみであった。この回答者の出身地は新潟県で、祖父母から聞いて知っているが、自分では使わない、という。多摩地域由来の「のめっこい」は、現在首都圏の大学生には知られていないことが確認された。次に「「のめっこい」ということばを使ってみたいか」尋ねたところ、この語を知っている1名を除いた回答は、「使ってみたい 63名 (17.7%)」「使ってみたくない 123名 (34.6%)」「わからない 169名 (47.5%)」(無回答1名)であった。知らないことばであるにもかかわらず、17.7%もの回答者が「使ってみたい」と回答しており、この語に触れる機会があれば使用が広まる可能性がうかがわれる。さらに、「「のめっこい」ということばはどんな感じがするか」6つの評価語から当てはまるものをすべて選んでもらったところ、「古くさい 181名 (50.8%)」「新しい 12名 (3.4%)」「おもしろい 186名 (52.2%)」「おもしろくない 4名 (1.1%)」「心地よい 24名 (6.7%)」「不快な 80名 (22.5%)」と、「古くさい」と「おもしろい」がいずれも過半数となった。両方を同時に選択した回答者も71名 (19.9%)いる。「古くておもしろい」という価値観がこの語の採用を後押しする可能性がある。¹⁰

なお、5節で取り上げたように、「のめっこい」という語は、本来とは違った意味で受け取られ

⁸ 類音類義語である「ぬめっこい」との類音牽引の可能性がある。

⁹ 2011年6～7月に、青山学院大学、慶應義塾大学、國學院大學、専修大学、日本大学、文教大学で実施した。配布・回収には、「首都圏言語」プロジェクトのメンバーの協力を得た。この項目の有効回答者数は356名。うち、首都圏1都3県(東京・神奈川・埼玉・千葉)出身者は218名。【調査A】とする。

¹⁰ この採用態度は、2節で取り上げた在来方言の再生利用とは異なり、「方言おもちゃ化」に基づく「ニセ方言」の使用態度と共通する。(田中2011:31)

ている可能性がある。この点について、以上とは別の首都圏3大学の学生314名に、「『のめっこい』はどのような意味だと思うか」自由記述で回答してもらった（2011年7月実施，携帯メールによる回答。【調査B】とする）。単語のみを提示し，文脈は示していない。その結果を表1に示す。本来の意味である「なめらか」という回答はわずか7名（2.2%），「親しい」は0名であり，最も多かったのは「かわいい」であった（例（20）参照）。また，「ヌメヌメ」「ヌルヌル」「ネバネバ」など粘着性の不快な接触感覚の意味が上位を占めた。3位の「しつこい」（例（19）参照），5位の「のろい」，7位の「面倒くさい」もすべて不快感情を伴うマイナスの評価語である。【調査A】の「『のめっこい』はどんな感じがするか」で，「不快な80名（22.5%）」が「心地よい24名（6.7%）」を上回って約1/4を占めた背後には，このような意味解釈があるものと推測される。さらに，もしも今後若年層でこの語の使用が広がることがあった場合，本来の意味と異なる「かわいい」または，不快な感覚感情を表す語として再出発することが予見される。

表1 「のめっこい」の意味

意味	人数	%
かわいい	47	15.0
ヌメヌメしている	39	12.4
しつこい	25	8.0
ヌルヌルしている	24	7.6
のろい	17	5.4
ネバネバしている	13	4.1
面倒くさい	9	2.9
飲みにくい等（音の類似）	8	2.5
ぬるい	7	2.2
なめらか	7	2.2
のめり込みやすい	7	2.2
（異なり 62種類）	314	100.0

（自由記述回答をグルーピング，上位11種を掲出）

7. 地域語の観点から見た首都圏の言語

以上，「のめっこい」という語を代表例として取り上げ，首都圏における地域資源としての方言利用の実態の一端について報告を行った。本稿はたった1語を扱ったケーススタディに過ぎない。しかしここには，共通語化が早く徹底的に進み，方言の存在価値があまり意識されることのない首都圏西郊地域が，「方言の価値の上昇」の時代の中で，どのように地域の中の方言に對しているか，という現状の一端が如実に現れている。

もとより，方言の地域資源としての活用のあり方は，首都圏内部でも一様ではない。このことについては，首都圏全市区町村の行政，教育委員会，商工会への悉皆通信調査を行った，本報告書第2部所収の亀田論文「首都圏における方言の地域資源としての活用 ―通信調査の結果から―」を参照してほしい。

1節で述べたように，首都圏の言語は多様性，重層性に富み，常に変化にさらされている。そのような中で「地域の日常語」としての首都圏のことばの実態と動向を把握し，それが，都市言語としての首都圏のことば，標準語の基盤である基準言語としての首都圏のことばとどのように関

係し合いながら存在しているのか、究明していきたいと考えている。

文 献

- 小林隆 (2007) 「方言機能論への誘い」 小林隆(編)『シリーズ方言学3：方言の機能』 v-viii. 東京：岩波書店。
- 田中ゆかり (2011) 『「方言コスプレ」の時代』東京：岩波書店。
- 日高貢一郎 (1996) 「方言の有効利用」 小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎(編)『方言の現在』362-384. 明治書院。
- 日高水穂 (2009) 「秋田における方言の活用と再活性化」『月刊言語』38(7): 24-31.
- 森田昇 (2007) 「"のめっこい" がキーワード —信用金庫に徹し格好いいことをやる必要もない—」『財政金融ジャーナル』7: 14-17.

付 記

本稿は、社会言語科学会第29回研究大会(於：桜美林大学, 2012年3月11日)におけるポスター発表、「首都圏における在来方言の地域資源としての再生の一事例 —多摩地域の「のめっこい」を例として—」の内容に修正を加えたものである。また、本稿の一部をまとめ直し、三井はるみ「地域語の観点からみた首都圏の言語の実態と動向の一側面」(『国語研プロジェクトレビュー』第4巻第2号, 118-126, 2013年10月, 国立国語研究所, <http://www.ninjal.ac.jp/publication/review/0402/pdf/NINJAL-PReview040206.pdf>)として公表した。発表に有益なコメントをくださったみなさま, また, 研究開始当初から多くのサポートをくださったプロジェクトメンバーのみなさまに感謝いたします。

図3に使用した方言集

●区部 ●【杉並区】森泰樹 (1980) 『杉並の伝説と方言』杉並郷土史会 ●北多摩郡 ●【武蔵野】財団法人武蔵野市開発公社 (2009) 『武蔵野境界 むかし語り：語り部宮崎勇氏にきく』, 【国立市】原田重久 (1977) 『武蔵野わらべ唄と方言』武蔵野郷土史刊行会, 【立川市】立川市教育委員会・鈴木為佐生 (1987) 『立川の方言』, 【立川市】立川市西砂川地区文化会 (1998) 『方言で語り合おうふるさと西砂川 [西砂川方言辞典]』, 【東村山市】東村山郷土研究会 (2011) 『東村山とその周辺のことば』, 【武蔵村山市】武蔵村山市教育委員会 (1990) 『武蔵村山の昔がたり —村山ことばによる口頭伝承—』 ●南多摩郡 ●【稲城市】坂浜歴史研究会 (1982) 『坂(さあ)浜(はま)ことば (方言) 昭和57年調』, 【八王子市】鈴木樹造 (1983) 『八王子方言考』かたくら書店, 【八王子市】塩田真八 (1965) 『八王子の方言』八王子文化サロン, 【八王子市】塩田新八 (1965) 『八王子の方言』 ●西多摩郡 ●【瑞穂町】瑞穂町教育委員会 (1993) 『瑞穂の方言』, 【埼玉県入間郡】関谷和 (2004) 『子どものころ聞いたことば話していたことば 埼玉県入間郡元狭山村 (二本木) の方言覚え書き (増補・改訂版)』, 【羽村市】平井英次 (1982) 『多摩の方言と人情 第二編』教育報道社, 【檜原村】小泉輝三朗 (1984) 『檜原方言記 付：方言語集』武蔵野郷土史刊行会